



今月の主な目次

- 放牧期の飼養管理について
- 酪農総合研究所の果たすべき役割と今年度の調査研究課題等について
- 道央圏内での緑肥導入事例
- 今年から出来る良質な自給飼料確保へ向けてのポイント

時の話題

雪印メグミルクグループとしての雪印種苗の役割

最初にこの度の東日本大震災により、亡くなられた方々に心からお悔やみを申し上げますとともに、被災された皆様には心よりお見舞いを申し上げます。今、日本は関東から東北にかけての広い地域で、いまだかつて経験をしたことがない災害に見舞われ、人々の生活、すべての産業が大変なところまで追い込まれています。早急な復興を心から願わずにはいられません。

この度の大地震で痛感したのは、地方に支えられた首都圏の姿です。物資、エネルギー、食品は不足し、部品の供給が滞り多種の製品工場等は生産に支障をきたし、地方の災害が都会まで波及していきました。現代の日本の消費文化を見直すことも必要と感じましたが、一方、地方なくして都会は成立たないことを心に留めたいとも思いました。

話は変わりますが、雪印メグミルク株式会社は平成23年4月1日をもって日本ミルクコミュニティ(株)および雪印乳業(株)を吸収合併しました。雪印種苗は雪印メグミルクグループの重要な子会社として、今後とも事業を展開してまいります。雪印メグミルクグループは「未来は、ミルクの中にある」をコーポレートスローガンとして、乳業専門メーカーの歩みをスタートさせました。またグループの企業理念として三つの理念を掲げています。一つ目は「消費者重視経営の実践」二つ目は「乳(ミルク)にこだわる」三つ目は「酪農生産への貢献」です。この理念はむしろ使命として捉えられ、特に「酪農生産への貢献」では、次のような考え方で説明されています。『私たち雪印メグミルクグループは、日本の酪農を基盤として成立っています。私たちは、酪農生産者の良きパートナーとして信頼関係を深め、乳の価値をしっかりと伝えていくことで生産者の想いに応えていきます。そして、牛乳・乳製品の需要拡大を実現することで、国内酪農生産の基盤の強

化と持続的発展に貢献していきます。』

雪印種苗はこの企業理念のもと「酪農生産への貢献」では重要な役割を担い、自分たちこそが出来る課題と捉え、酪農生産者の皆様にお役に立つ会社であることを心に誓っている次第です。雪印種苗は昭和25年12月に当時の雪印乳業から分離・独立をしてから、一貫して社是で掲げている様に「技術と誠意で農業奉公」を精神的支柱として事業を進めてまいりました。飼料作物種子分野でのメーカーとして、また乳牛用配合飼料のメーカーとして、両輪を兼ね備えて「酪農生産への貢献」のため開発、商品供給を引き続き実践してまいります。

今年の生乳生産状況は、昨年夏の猛暑の影響を受け、分娩時期の遅れや自給飼料の品質低下等で厳しい状態にあると推測しております。都府県では常態的に飲用乳の不足状態が続き、北海道での増産が期待されているところですが、思うように増産できないのも現実です。今年の牧草、とうもろこしの生産が量的にも質的にもよいことが望まれますが、ここ最近は草地更新率も低迷し、とうもろこしも病害による被害も増加しており、安心できない状況にあります。北海道のような土地利用型の酪農経営においては、この自給飼料(草)が生乳生産(牛)を支えているのは間違いありません。どんなに配合飼料で生乳生産をカバーしようと思っても、自給飼料の良し悪しは必ず牛に現れ、生乳生産に影響を及ぼします。今日こそ原点に帰り「草作り」を実践しなければならないと思っています。

雪印種苗は「良質自給飼料の増産」に向けて事業を展開してまいります。北海道での草地植生の改善のための品種の開発、低コスト型草地更新技術の提言、雑草(シバムギ、リードキャナリー等)に対する対処技術の開発を進めています。またとうもろこしは温暖化に対応した耐病害品種の開発、良質サイレージ化のための資材と技術を提供してまいります。引き続き皆様のご理解をいただきたくお願い申し上げます。

(常務取締役 赤石 真人)

以上